



119号
2006/12/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp
Eメールのアドレスが上記に変更になりました。



歌の披露 中国四川省甘孜藏族自治州理塘県にて [2004年8月] 撮影鈴木晋作

「わんりい」119号の主な目次

北京雑感その⑩「北京の公園Ⅲ」	2
媛媛来信②「山西太鼓音楽」	3
「陝北女娃」⑮〈雪雪と雪琴〉	4
「陝北女娃」⑯〈文瑛と文文〉	5
私の調べた四字熟語⑧・吳越同舟	6
松本杏花さんの俳句集「拈花微笑」を読んで	7
松本杏花さんの俳句集「拈花微笑」より	7
韓国・智異山に登るⅡ	8
中国を読む⑳【中国を読む】からの出会い	12
私の四川省 一人旅(九寨溝・黄龍・松藩)	10
ぼくが見て感じたスリランカ④「世界一高い玩具」	13
アフリカとの出会い⑭「大統領選挙にかける思い」	14
「わんりい」の活動から	15
「わんりい」掲示板	16

♪♪中国人歌手・趙鳳英さんと一緒に歌おう!♪♪

「中国語で歌おう!会」

まちだ中央公民館で新規発足 会員募集中!

会場: まちだ中央公民館 7F・第一音楽室
JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩 2分、小田急線南口徒歩 5分町田東急裏 109 ファッションビル 7F

【12月の練習日】 12月15日(金) 19:00~20:30

練習曲: 「四季歌」(作詞: 田漢 作曲: 賀緑汀)
*「四季歌」は映画「馬路天使」の中で歌われた人気の歌でテレサテン等も歌っています。

時間: 19:00~20:30 会費(月1回): 1,500円

指導: 趙鳳英 (元中国重慶歌舞団歌手、四川音楽学院講師)

*体験参加が無料になりました!

皆様のご参加を歓迎します。

*録音機をお持ち下さい。

紫竹院公園は、北京市海淀区にあります。中関村南大街と西直門外大街が交差する白石橋の北西の角で、北隣は国家図書館、道路を隔てた東隣は首都体育館、首都体育館の東に北京動物園という位置関係です。

この紫竹院公園、6月までは、入園料2元でしたが、7月から無料になりました。どうして無料になったのか、その目的は分かりませんが、お陰で、私は気軽に公園に行くようになりました。2元が惜しくて行かなかったわけでは、決してないのですが、不思議なことに、無料になってから、頻繁に出かけるようになりました。

公園の中の変化は、と言うと、所々に売店が新設されたり、野外にテーブルを置いて軽食が食べられるようになったりして、それに連れて、従来からの売店が出来たてのクッキーや饅頭を売り出したりと、商業活動が随分盛んになりました。朝早くから散歩に来た人たちが買って、朝食として食べたり、家に持ち帰ったりするのを見かけるので、入園料を無料にした目的はこんなところにあるのかな、なんて勝手に想像してしまいました。

紫竹院公園は、中国の公園の例に漏れず、真ん中に大きな池があって、東側の一角には蓮池があり、西側の一角は釣堀になっています。池には、中ノ島のように張り出した部分があり、その突端にはしゃれた茶店があります。夏の昼下がりでも、その店の席に座ると、三方水に囲まれ、水面を渡る涼風が頬に心地よく、暫し酷暑を忘れてしまいます。

池の辺には、大小の石を配して、水辺に座って水に触れることが出来るようになっています。石組みが洒落ていて、見るだけでも楽しいのですが、そこに入り込んで座ったり、石を伝って歩いたり出来るのがいいところです。日本なら、「危ないから入ってはいけません」なんて言う立て札が立って、立ち入り禁止にするようなところでも、自由に入れて、その代わり、公園管理者は、事故に責任を負いません、という中国式やり方で、自由に水と戯れることが出来るのです。

一般に、中国の公園や庭園には石がふんだんに使われて、独特の雰囲気醸し出しています。北京市内で自然石の石段や、大きな岩山を見ると、これらの石はどこから来たのだろうと思い、労力の大変さに感心してしまいますが、最近、北京への石の供給地の一つを知ることが出来ました。清朝西陵へバスで行ったとき、盧溝橋で高速道路を降りて一般道路を南西に走っていると、ガイド

さんが、「この辺りは、昔から、北京市内へ石材を供給しています」と教えてくれました。道の両側に大規模な石屋さんが立ち並び、大きな岩や、面白い形の自然石、様々な石の彫刻などがあちこちに置かれていて、バスを降りて見学したら面白いだろうなぁと思いました。あとで地図を調べると、そこは、北京原人の故郷、周口店に近いところでした。石屋さんの後方には、削られた岩山がはるかに連なっていました。自動車ですと、北京の中心から1時間半ほどの行程ですが、昔は道路も未整備で、重い石を都に運ぶのは随分大変だったのだろうと想像しました。因みにこの場所は、行政区画上は北京市房山区、北京市の南の端に位置しています。

話を紫竹院公園に戻すと、公園では無料化に先立って、公園のあちこちに配置してあるベンチやゴミ箱を、青竹に模したものに変わっていました。清掃にも力を入れていて、公園の中はとても清潔です。無料化になった今、これらの費用はどこから支出されるのか、他人事ながら心配です。勿論、有料の時から、入場料収入でこれら諸費用をまかなうことは出来なかったようですが、全くゼロになってしまうのですから、どうする積りなのでしょうね。

中国の方の予想では、何か実験をしているのではないかというのですが、どんな実験でしょうか？ 前述したように、公園内で物品の販売をしたりする、公園の運営を民間業者に委託したのかも知れません。今中国政府が力を入れている、行政の民営化の一環でしょう。どういう契約かは分かりませんが、少なくとも、民間への委託料によって公園の維持費用を賄って、行政の負担を軽くしようという試みでしょう。ひょっとしたら、清掃も含めて、維持管理全体を委託したのかもしれない。

北京の人々は、この公園を、朝夕の散歩、ダンス、京劇、楽器や声楽の練習等に活用しています。私も夏の間、朝7時過ぎに散歩をしましたが、その頃には、社交ダンスのサークルが盛んに踊っていました。二胡を練習している人もいます。暫くすると、京劇を歌いたい人が来て、二胡を引く人に伴奏をリクエストして、何曲か歌います。その間に同好の士が集まって来て、批評をしたり教えあったりして、時間が経つと、一人、二人と帰っていきます。この人々は、サークルを作っているのではなく、個人個人でやって来ては、その時その時で相手を見つけて楽しめます。北京の公園は、市民の社交場として、日本の公民館のような役目を果たしているのです。

2、3日前、インターネットで何気なく次のようなニュースを読みました。

千四百年の歴史をへて総勢40名来日！

黄河太鼓

中国山西省・絳州鼓楽芸術団(上海)

2006年10月18日(水)18時30分開演

場所 宝山ホール(鹿児島県文化センター)

山西太鼓も日本へ演奏しに来てよかったなあと感じました。

上述の「絳州」は山西省の南、いわゆる晋南と言うところにあり、「絳州太鼓」は山西太鼓の代表なのです。

晋南地方は、中華文明の発源地で、伝説の三皇五帝^{注1}の古里でもあると言われて来ました。

伝説では昔、黄帝は蚩尤^{注2}と戦い、蚩尤は銅の頭をして、石を食べ、空中を走り回る怪物であり、大変強かったので、

黄帝はなかなか勝てないでいました。その後、黄帝は奇妙な野獣を手に入れ、その皮を剥いで太鼓に使用すると、太鼓の音は三千八百里まで響き、世間をひどくびっくりさせ、蚩尤は畏れて、とうとう降伏したということです。

1978年に晋南の襄汾陶寺古跡で、四千年前の陶製の、中国最古と見られる太鼓が出土し、太鼓の起源は遠古に遡ることが裏付けられました。研究によれば、太鼓は先ず原始的な崇拝活動の祭儀用具として使われ始め、神を祭ったり、雨乞いをする時、踊りながら太鼓を叩き、その音が神様と交流できると思われていました。後に一般の人間生活でも使用するようになり、人々の喜怒哀楽を表す道具にもなりました。

晋南地方では、今でも、毎年三月の三日、嫁した娘が実家へ帰る風習がありますが、その折、地元の人々は、盛大な太鼓イベントを行います。それは、ずっと昔、尧王は二人の娘を舜に嫁が

せ、毎年三月三日に娘を実家に迎え、四月にまた姑の元へ送るという儀式に始まるものだそうです。

山西太鼓の演奏は、盛大で、何十人、或いは何百人が揃いの衣装で演奏するのが特徴です。二十センチほどの小さな太鼓を、腰に括って叩くものもあれば、直径三メートルもある大きな太鼓を、十人が囲んで叩くというものもあります。

また、楽譜は大変多いのですが、「秦王点兵」(秦王による兵の招集)のような黄河あたりの古い物語に由来する伝統的なものもあれば、「黄河船夫(黄河の船曳夫)」のような黄河辺りの人々の生活を描くものもあり、また「老鼠娶親(鼠の嫁入り)」のような喜劇

的効果を持つ楽しいものもあります。

山西太鼓音楽の風格は素朴且つ豪快で、黄河の流れの如く勇ましく、春雷の如く人の心を震わせ、天地を動かす気迫があります。それを聞く人々は、誰でもその

迫りに感動し、精神を鼓舞させられるに違いないと思います。

私は何回も山西太鼓を鑑賞したことがありますが、山西太鼓音楽は、目、耳、心による、即ち全身で感じられる芸術だと思っています。山西太鼓音楽は近年になって、次第に人々に知られ、特に第十一回アジアスポーツ大会開幕式において披露されてから、世間を驚かせ、世界の注目を浴びています。

2003年、晋南「絳州太鼓音楽」は世界無形文化遺産に登録されました。また、2008年の北京オリンピックの開幕式でも、登場する話しが流れているようです。

注1) 三皇五帝：中華民族の伝説中の原始部落首領

伏羲、神農、燧人(三皇)

黄帝、颯項、帝嘗、唐尧、虞舜(五帝)

注2) 蚩尤：伝説の原始部落である九黎部族の首領



15
雪雪和
雪琴

刘雪琴 1994年2月27号
家住刘家山小学 二年级
爸爸:妈妈:妹妹:姐姐:弟弟:
爱好:丢手绢
理想:当科学家

刘雪雪 1991年11月
刘家山 土岭 四年级
爸爸:妈妈:妹妹:妹妹:弟弟:
爱好:丢手绢
理想:当老师

雪雪と雪琴の撮影はかなり前から続けていました。特に2002年の麦の収穫の季節に写した家族の、麦畑での農作業やお昼を食べている写真は満ち足りた生活の息づかいが感じられて、見るたびに、とても暖かい気持ちになります。

2002年6月の麦の収穫の季節で、太陽が照りつけ、灼熱の暑さに焼かれるようでした。この年、天の神様はとても情け深く思いやりがあって、10年来続いた旱魃に終止符を打ち、適切な時に雨を降らせ、風を送ってくれたので麦の生育はとてもよく、麦の穂もしっかり実り、村の人たちの顔には喜びが溢れていました。

刈り入れの時期は、どの家も老幼男女すべて一家を挙げて仕事に向います。雪雪の家の口バ車が昼食を届けに行くのに、私がついて行きますと、山間のくぼ地にやってきました。ここには雪雪の家族以外にも何家族か他の家の人たちがいました。大人は麦を刈り、男の子は背に麦を運びます。彼等は谷の下から自分の体の2倍もあるような麦の束をよろよろしながら担ぎ上げてくるので、その顔はそれぞれ真っ赤です。どんなに暑くても長袖長ズボンを着なければなりません。



麦畑伝食事風景

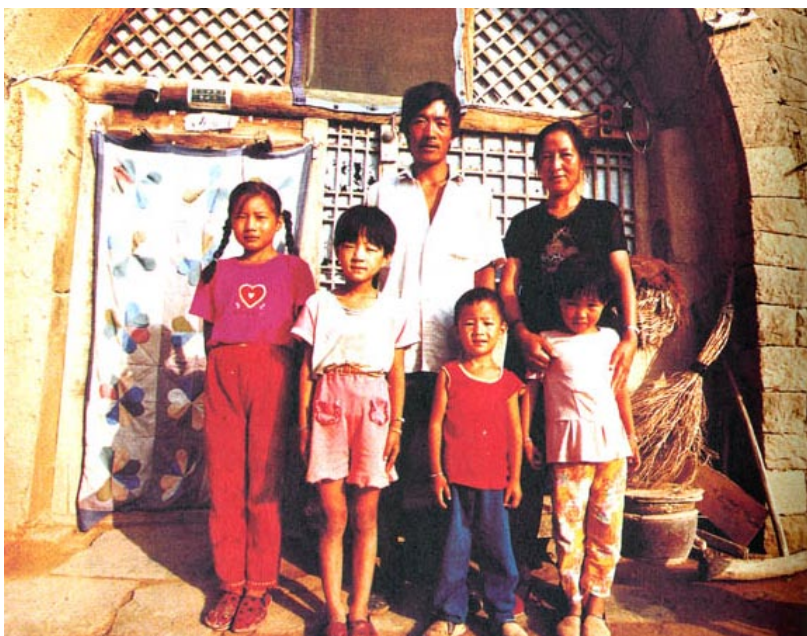
さもなければ、麦のノギが肌を刺して血をにじませることになるでしょう。

お昼ご飯の車が来ると、雪雪の家族は仕事を止め、刈り取られてきれいになった麦畑に輪になって座って、^{ちまき}粽を食べ、お粥をすすり、話したり笑ったりとても楽しそうです。彼等の心のこもった招きを受けて、私も“黄米紅棗”の粽を2個頂き、その甘く滋味のある味と、明るく快活な雰囲気を楽しみました。未だに忘れられません。

雪雪は粽を食べ終わると、粽の葉を口バのところに持って行き食べさせ、嬉しそうに麦畑で踊り始めました。豊作を喜び、生活も保障されたことが嬉しいのです。私も太陽のぎらぎらした陽射しで目がくらむのも構わず、地面が熱気で沸騰する中で、3時間以上もここにいました。少なからぬ得がたい貴重な写真を撮る

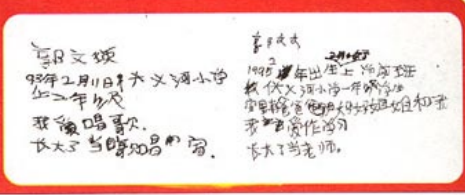
ことも出来ました。これらの写真は、今、黄土高原で生きる人々の生活のありのままの一側面を写したもののなのです。

雪雪は長女であり、二番目の雪琴と三番目共に女の子で、四番目がやっと男の子です。写真を撮る時はいつも心して姉弟が一緒にいるところを写しました。お姉さん達が弟をととても大事にしている様子がよく分かります。彼女達は小さな頃から誰が家の中心なのか自ずと知っているのです。何年か後、彼女達が結婚し親となった時、(他の女達と)同じように家族の血筋が絶えないよう全力を尽くすのです。(田井訳)



16

文瑛
文文



正月、伏羲河村の中ほどにある崩れた塬の下で、おじいさん達と若者が円陣に座り、陽を浴びてカルタをしており、何人かの女の子が小鳥のようにチーチーピーピー周りを囲んで遊んでいました。その中に上から下まで赤い服を着た女の子がいました。真っ黒いつやつやした髪の毛が顔の周りを蔽い、笑うとウサギのような歯がみえてとても可愛いのです。私が遠くから見つめると彼女も藍色の帽子を手に私を見えています。

一年半後の2001年8月、私は写真を手にこの女の子に会いたいと伏羲河村にやって来、女の子の家を探し当てました。女の子の両親はとても暖かくもてなしてくれ、水やタバコを勧めてくれたりしました。父親は写真を見るや首に玉飾りを掛けた女の子を呼び、オンドルの上で私のためにアンケートを書かせたあと、写真を取って又しげしげとしばらく眺めると、突然気がついたように言いました。

「写真の子はこの子じゃない、お姉ちゃんの方だ。」
そう言いながら、オンドルの上にずうっと座ってひと言も話さなかったやや大きい女の子を指しました。

私も仔細に見てみると確かに“ウサギの歯ちゃん”はこの女の子です。彼女はずうっと傍に座って、羨むような眼差しで妹の一挙一動を見ていましたが、私がアンケートを頼むと嬉しそうに、オンドルに腹ばいになって一生懸命にアンケートに書き込んでくれました。

父親によれば、大きい子は文瑛といい、小さい子は文文とのこと。私は彼女達を部屋の外に出てもらって何枚かの写真を撮りました。妹の文文を撮影する時、お姉さんの文瑛はおとなしく傍で立っているのですが、文瑛を撮影しようとする時、文文はお姉さんの傍を離れず、しばしば頭を(カメラの前に)突き出して、横にした頭がカメラの中に入ったりしました。

その後、伏羲河村に来る都度この姉妹の写真を撮っていましたが、そのうち、2人の傍らに彼女たちにとってもよく似た、もっと小さな女の子の姿があるのに気が付きました。訊いて見ると2人の妹とのことでした。



文瑛と文文

又、年齢がやや大きな女の子に一度偶然出会い、その後、何度も見かけるようになったその子は、2人のお姉さんで、郷の学校に行っているのだと知りました。

私はこの四姉妹を並べて写真を撮りました。村の人の話では、実はこの家ではこの四人にとどまらずその後も女の子が生まれ、ほかにも人にあげた子がいるとのことでした。

両親はきっと人には言えない辛さを味わっているでしょう。陝北のこのあたりではどの家も男の子が生まれなければ、肩身が狭いということもありますが、一番大切なことは年老いたとき頼れるものがいず、面倒を見てくれる人がいないということなのです。

(田井訳)



文瑛と一番下の妹

今回はお馴染みの「呉越同舟」(ぶえつごうしゅう)です。

例えばある会社で、日ごろ仲の悪い、A部長とB部長とが会議で同席したような場合に「ああ、今日はA部長とB部長が呉越同舟だ。」などと言いますね。

「呉越同舟」といえば、現在ではこの例のように単に、「仲の悪いもの同士が、たまたま同じ場所に居合わせる」という意味に使われることが多いのですが、本来の意味は、「仲の悪いもの同士が、同じ目的のために一時的に協力する」ということです。

昨日まで敵味方に分かれて戦っていたもの同士が、「同じ目的のために一時的に協力する」という意味では、例えば野球のオールスター戦にたとえると分かりやすいと思います。今まで敵対していたセ・リーグの各チームが、この時ばかりは一致協力して、パ・リーグのチームに向かってゆくわけです。

また、時代劇や西部劇などで、長い間反目を続けていた二つのグループの前に、突然強力な第三の敵が現れ、この新しい敵が二つのグループにとって共通の敵であり、負けたら二つのグループとも滅びてしまうような場合、取り敢えず今までの反目は忘れて、一致協力しながら共通の敵に向かってゆく……。と言うストーリーも良くありますね。

では辞書はどうなっているのでしょうか。

現代国語辞典(三省堂)には「仲のわるい者どうし(おたがいに争う立場にある者どうし)が、同じ場所において行動をともにすること 中国の故事から」とあります。

中日辞典(小学館)には「呉越同舟 wú yuè tóng zhōu」は、何故か見当たりませんでした。

それでは、原典を見てみましょう。原典は「孔子一九地」です。

『孫子』では、兵法には9つの地があり、9番目のものを「死地」と言っています。死地といっても、入れば必ず死ぬ場所ということではなく、逡巡せずに直ちに戦えば生きる道がある場所のことです。兵を死地に置いて戦うことの重要さを説明するために、孫子は呉越同舟の話を用いています。

「呉と越は仇敵同士だが、仮に呉人と越人が同じ舟に乗り合わせ川を渡る場合、強風で今にも舟が転覆しそうになれば、呉人も越人も普段の敵対心を忘れ、互いに左右の手の如く助け合って危機の乗り越えようとする。」

つまり、兵を死地におけば、兵の心を一つに固めることができる、そこが重要だと言っているのです。

ところで、前述で中日辞典に「呉越同舟」が見当たらないと書きましたが、念のためインターネット上、中国のサイトを開け、呉越同舟を検索してみました。かなりの数のヒットがありました(Yahoo中国でのヒット数2100)。内容を見ると出典も前述の内容と同様であることがわかりました。このことから中国でも呉越同舟は良く使われているものと推測されます。

参考までに以下に検索結果の一例を挙げておきます。

呉越同舟 - 成語 「夫吴人与越人相恶也,当其同舟而济,遇风,其相救也,如左右手。」《孔丛子・论势》:“吴越之人,同舟济江,中流遇风波,其相救如左右手者,所患同也。”后因以“吴越同舟”比喻虽有旧怨,但当同遭危难,利害一致之时,也须互相救助,共同努力。」

最後に今回の呉越同舟に関連する語句の解説をいくつか参考までに掲載します。

呉：中国春秋時代の周の諸侯列国の一つ。領地は現在の江蘇の南部と浙江の北部。紀元前473年に越に滅ぼされた。

越：中国春秋時代の周の諸侯列国の一つ。領地は現在の浙江省東部にあり、のちに江蘇・山東の両省まで拡大された。紀元前334年に楚に滅ぼされた。

孫子：中国の兵法書。1巻13編。呉の孫武撰と言われる。戦略戦術の法則、準拠の詳細を説明した。古代中国の戦争体験の集大成で簡潔警拔な記述による名文で知られる。後世兵学への影響は大きく、「呉子」「六韜」「三略」などの類書を生じたといわれている。

孫武：中国春秋時代の兵法家。齊の人。紀元前6世紀頃(生没年不詳)呉王闔閭に仕え、楚・晋を威圧し、呉を覇者とした。軍隊に節制規律を徹底させ、兵書「孫子」を著したとされている。

紅葉一枚葉にす「拈花微笑」を読んで——章 方松

ある日、著者である松本杏花さんのところに、章方松氏という見知らぬ中国人読者から、一句一句を味わい、その感想を述べた丁寧な文章が寄せられました。中国の方の俳句への理解の深さに感動し、その要旨を掲載します。(原文中国語)

花は我、我も花。花と我は重なり、共にある。花は咲いて散り、風は吹き雨は降る。これは自然であり、生命であり、現象である。詩も文も詞も曲も、皆、自然風物の美しい境地を表現しようとしている。日本の俳句は、美を読む芸術であり、自然の風物を借りて感情や心のありようを表現する芸術といえる。

いい詩は言葉では伝えられず心で理解する。「拈花微笑」とは以心伝心で世界を感知することで、俳句の美とは、潜在意識によって世界に内在する意味を感じ悟ることといえる。ものの美しさは言葉ではなく心によって感じられる。季節と共にある生命は自然そのものであるから。俳句は季節を題材として、内なる感情や考えを伝えている。松本杏花氏の俳句は、豊かな春夏秋冬の四季の自然美を描いて、内なる心のありようを歌っている。「雪解川命の鼓動響きたる」「砕け落つ薔薇に秘めたる熱き情」「鶏頭の倒れてもまだ朱を吐きけり」……。

俳句と中国の詩の似ているところは、自然風物に生命をなぞらせ心情を託するところだ。歴史上の日本の俳人は、山間に住み、清貧に徹し、自然と感情を呼応させ、自然界の命のリズムを感じ悟ろうと心がけ、静寂、幽玄、侘びとか寂び、孤独感などを楽しんでた。俳句は季節に託して感情のありようを表現するだけでなく、自分の心を物に託して豊かな感情のありようが表現される。松本杏花氏の作品の特徴である。「春愁や弥勒菩薩の指の先」「頭も腕もかけいし仏に冬の蠅」「春暁の飛天の琵琶を耳にして」……。

俳句の心は禅僧の説法のように、句に深く込められた意味を読者が自身の人生観と学識で味わい感じるものである。俳句は恰も一輪の花のようで、各人各様に鑑賞し感

じる。また、句を詠む場合は季節を敏感に感じ取って、風物の移ろいを知り、生命の移ろいを知り、自ずと禅の哲理を表現する。「糸と時紡ぐ娘の手に春の色」「三峡の客下船して月残る」「惜別の莫高窟；や霞み立つ」「立ち膝の観音の目にある春愁」……。

現代科学技術が日進月歩で発展し、原始的農耕生活の自然環境は変わって来た。昔、俳句に詠まれた自然環境が失われ、自然と心情が融けあるような俳句はもうできないのではないかと心配する向きもある。私は一般読者として「拈花微笑」を読んで味わった。松本杏花氏の俳句には彼女なりの感情、考え、茶道や華道による審美的な感性に基づく豊かな感情と含意が感じられる。「紅葉一枚葉にす」一枚の霜で赤くなった紅葉は日や月や星、梅雨や雨や霜や雪など「秋景色」を反映している。この「秋景色」こそ個の生命であると共に全体の生命でもあるのだ。まるで一滴の露から太陽の光を知るように、この一首の句から人類と生物とのさまざまな関わりが読み取れる。

中国と日本は「一衣帯水」であり、古代中国の詩が日本にも深い影響を与えている。中国の哲学や詩経、楚辞が俳句の原始的な精神ではないかと思う。松本杏花氏の俳句を觀賞するに当たって我々の文化的な素養や教養が必要であり、情感を豊かにし思考力を鍛え、そして生命への理解を深める必要があると思うのだ。

章方松 中国浙江省温州市龙湾区文学芸術界連合会職員
中国紅樓夢研究学会會員

著書に、學術専門書「中国上古文化与气功起源」、散文集として「松風絮語」、「池上樓筆記」、「苔痕階綠」、「大羅山筆記」がある。

松本杏花さんの俳句《拈花微笑》より

三峡の客下船して月残る

xīngyè sānxiá xíng
星夜三峡行

yóukè xiàchuán tiān yǐ míng
游客下船天已明

yuè réng liú kōngzhōng
月仍留空中

季語：月、秋

此句为作者在有三峡时的感叹之作。在下船的瞬间、发现月亮仍留在空中、暗忖这不是在昨晚相见的月亮吗？游客都下船了、月亮也该消失了吧！然而秋天的晨晓、月儿却迟迟不退、是依恋远方的客人、还是烘托肃秋的清朗、读者自会咀嚼一番吧！

洞庭や身に入むほどに孤舟あり

cāngmáng dòngtíng yōu
苍茫洞庭幽

hánqì qīn shēn jìliáo qiū
寒气沁身寂寥秋

hú shàng piào gū zhōu
湖上漂孤舟

季語：寒气、秋

寒冷当指冬季、而寒气袭人则指深秋的感觉、与凛凛寒风不同。此句描写了洞庭湖的秋景、如同一幅水墨画、荡淡淡几笔、绘出了枯寒的气氛。

杜甫（登岳阳楼）亦有类似描写：昔闻洞庭水、今上岳阳楼。……亲朋无一字、老病有孤舟……

由此可见、文人墨客对洞庭风光都会产生诗兴、中日文化的交流也是远流长的。

前号118号に続いての智異山登山記です。ルートマップは図1に示します。

登山記：2006年9月10日(日) 晴れ

北麓のペクムドン(白武洞)の民宿を06:50出発(海拔高度530m:高度計による、以下同じ)。07:00に国立公園入園切符売場の小屋で入園料(1,600ウォン)を払い、その先をすぐ左に折れてキャンプ場を横切って登山道に入る。両側にブッシュが茂った森林の中の沢沿いの道。国立公園だけあって、樹木には種名を書いたプレートがひんぱんにある。沢沿いの緩やかな広い登山道で、礫が散らばっているが歩きやすい。つぎつぎに黒い新素材の登山服を着た韓国の登山者に追い越される。

高度850mあたりから道はやや急になり、整備された石畳状の階段になる。階段の途中に広い水場がある。整形した石積みの長方形の段ができており側面から水がでている。水場から石段状の道はさらに急になる。登り詰めて尾根に出ると森林の中の細い尾根道。なだらかな部分と急な階段状部分とが交互にある。マンバウイ(網岩)とよばれる風化した花崗岩の巨岩を通り、高度1520mあたりから尾根の西側をからんで進む。

主尾根に出たところが山小屋チャントモク=サンジャン(場基項山荘)である(1680m)。2階建ての大きな小屋で、2階の受付で予約を確認する。チェックインは夕方6時からで、それまではホールで待つように言われた。われわれは外に出て昼食をとり、頂上に向けて12:00に小屋を出発した。

頂上山稜

小屋の裏から巨岩の間を縫う急なぼりになる。両側はトウヒなどの針葉樹林である。すぐになだらかな頂稜に出る。森林が破壊され白骨化した枯木と岩塊が散在する草原状になる。よい気候で西側と南側の眺望が開ける。12:20チェセクボン(帝釈峰)高度1800m。大きな礫の間に白と紫のキクが咲き乱れてロックガーデンのようだ。道の両側に張ってあるロープを無視して植生の中で写真を撮っている登山者がいる。風上(北側)の枝がなくなった偏形樹がある(写真1)。

帝釈峰の北面から智異山最高峰チョナンボン(天王峰)頂上までのあいだにはいくつもの岩峰が樹林の中にそびえている。山頂への登りにかかる。急な岩場に道がつけられている。門のような巨岩の間に鉄製のはしごが設置されている。はしごでは下ってくる人を待たなければならない。

13:05に天王峰頂上についた。なだらかな広い山稜の



図1 智異山 白武洞から天王峰までのルート(点線)地図上方が北



写真1 帝釈峰の頂上稜線の偏形樹。東側から西を見ている。



写真2 智異山天王峰頂上の石碑。

うえに高さ10mくらいの花崗岩の岩塊が突き出ているのが頂上である。頂上岩塊の上には、登山者がいっぱい、昼食をとったり写真を撮ったりして混雑している。快晴で360度の展望が得られた。北には山脈と並行する広い谷が望まれ、南側の遠方には海らしい霞んだ空間が広がっている。南北にのびる支尾根は緩やかに延び、あいだの谷も深くはないがどんづまりの谷頭斜面は急である。全山森林におおわれ崩壊地はほとんどみえない。引き返して14:05

小屋に帰り着いた。帰り道、帝釈峰の東側で3人の登山者がロープをこえて植物を採取しているのを目撃した。

山小屋

チャントモク小屋のホールや居室では飲食は禁止されているので、小屋の階下にある炊事場で夕食を作り、夕暮れの風景を眺めながら外のテーブルで食べた。炊事場に水栓はなく小屋から高度差30メートルほど下がった水場に汲みに行く必要がある。18:00に放送がありチェックインが始まった。男女別べつの部屋で、床から一段高くなった板張りの就寝スペースは、日本の山小屋と同じように、壁に書いてある番号で寝場所を指定される。番号は一つおき、つまり二人用のスペースが提供された。発電機が一晩中まわっており暖房機が動いていた。

下り：9月11日(月) 晴れのち曇り小雨。

早朝4時頃から出発する登山者で騒がしい。われわれはラーメンを作った後0743小屋出発、昨日登った道を下った。温子の膝が悪いので、うしろからどんどん追い越されるのを気にせず超スローペースで下った。9時をすぎると(月曜日であるが)多くの登山者が登ってくるのに会う。12時過ぎ、ペクムドンの民宿に着くと小雨が降り出した。

智異山の地形

智異山の緯度は関東山地とほぼ同じである。1915mという高さや、なだらかな山稜とやや深い谷は大菩薩嶺(2057m)周辺の山やまとよく似ている。地質は花崗斑岩でピークなどの高い部分には地形学でトアと呼ぶ岩塔がある。天王峰から帝釈峰、さらに西側にかけての山稜は、北向き斜面が緩やかで南向き斜面が急な非対称山稜である。緩やかな北向き斜面は、氷河期には、森林がなく砂礫に覆われて、凍結作用が作用した砂礫斜面になっていた。

地形図

出発前に「智異山登山案内図」(縮尺1:65,000の等高線地図、等高線間隔20m、コースタイム記入、主要ピーク名は漢字表記)を東京神田神保町の韓国書籍専門店「三中堂」で購入することができた。ソウルの地下鉄駅「ウルチロサンガ(乙支路3街)」の地下商店街の地図専門店「ソンジ地図センター」では縮尺1:50,000地形図を購入することができた。

コースタイム

上記「智異山登山案内図」によると、ペクムドン→チャントモク小屋3時間20分、小屋→天王峰1時間10分、天王峰→小屋1時間と小屋→ペクムドン2時間50分。上記地図店で買った登山用地図ではペクムドン→小屋4時間、小屋→ペクムドン3時間。われわれは登り5時間弱、くだり4時間半(休憩時間含み)というのんびりしたペースで歩

いた。

智異山の位置とその重要性

智異山は朝鮮半島の脊梁であるソペク(小白)山脈の南端、山脈が対馬(朝鮮)海峡に没するところにある。ここより南には高い山はない。この位置には大きな意味がある。

頂上には石碑があり、東に向いた面には「智異山天王峰」、西向きの面には「韓国人の気像ここに発源する(和訳)」と刻まれている(写真2)。「気像」とは気性・品位の意味で、民族の霊山ともいわれることを意味しているのだろう。「風水」の考えでは、山脈は、単なる山やまの連なりとしてではなく、「気」が流れる脈として理解されていた。中国のクンルン(崑崙)山に発した「気」は、白頭山から朝鮮半島の各地に山脈をとおって流れこむ(図2)。そして、「気」はそのままでは、智異山から海峡を越えて日本に流れ込む。智異山東南山麓の実相(シルサン)寺は、その「気」が日本に流れないようにするために建立されたと言われている(南原市観光案内ブックレット)。智異山の重要性は高さだけではないようだ。

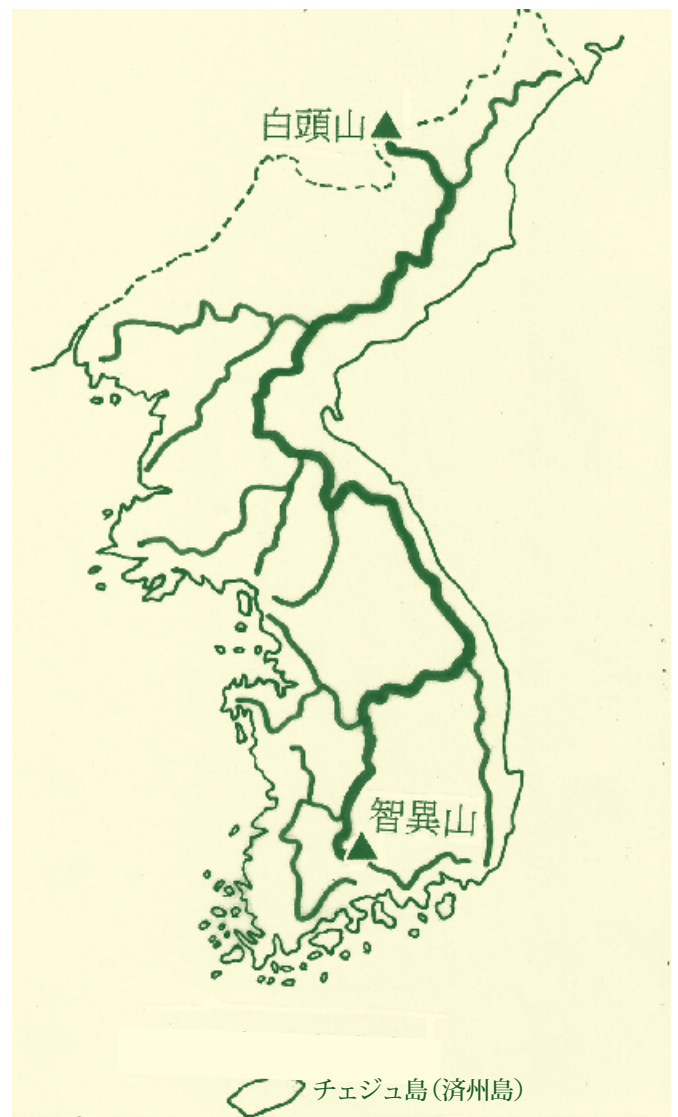


図2 朝鮮半島の「気」が流れる地脈

それまで過ごしていた山間部の村や街と違って成都是大都会だ。立ち並ぶ高層ビル、デパートに並ぶ最先端のファッション。排気ガスを吐きながらブンブン走る車、そして人、人、人…

私はまるで初めて都会に出てきた田舎者の気分だった。ほんの二週間前にもっと大きな都会からこの国にやってきたとは思えないほど、都会に対して違和感を覚えている自分がいた。ひんやりとした山の中から下界に下りて来た私にとって、八月の成都の空気はじつりと蒸し暑く排気ガス臭かった。優しい人達のいる山の村が恋しくてたまらなかった。

しかし、本来12日間の旅程で取られた私のビザは15日間の短期滞在用のもので、旅を続けるのならまずビザの延長手続きを行わなければならない。手続きは公安で簡単に行けるという事だったが、私が成都に着いた日は土曜日。月曜日まで手続きはお預けだ。更に宿の人に話を聞いたところ、手続きをしてもビザを受け取るのは4日後になるという。私は当分の間成都滞在を余儀なくされる事が判明したのだ。これはショックだった。なんと後一週間出発できない。

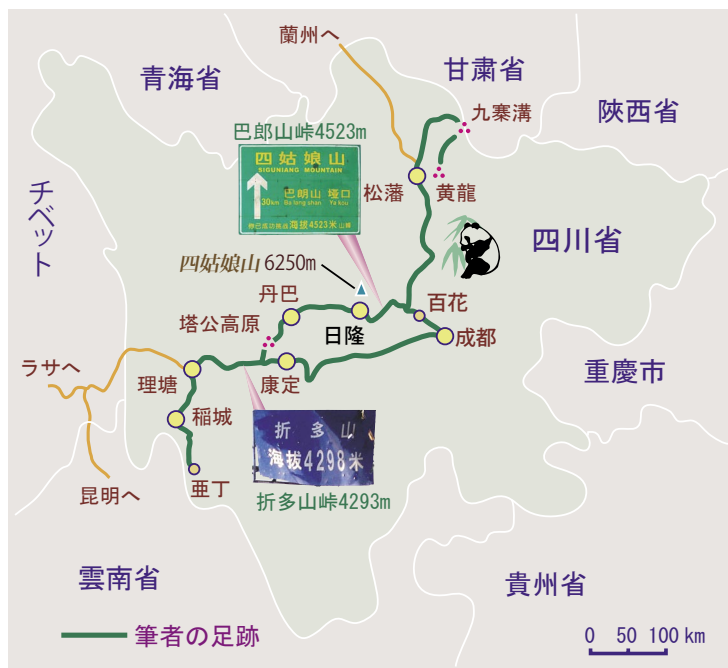
三国志の舞台であり、唐代の詩人杜甫にもゆかりのあるというこの街は、いたるところに名所や旧跡、茶館などがあり中国の文化に興味がある人にとっては楽しい街だろうと思えるが、山間部に暮らすチベット族に惹かれ心が逸っている私にとって一週間過ごすには退屈な場所だった。

結局ビザを待つ間、時間つぶしに他の土地に出かける事にした。

四川省には「中国人なら誰でも一生に一度は訪れて見たい場所」と言われている中国きっての観光地、九寨溝がある。私は基本的に観光地は好きではないが世界自然遺産にも登録され、その美しさの呼び声高い九寨溝にはかなり心惹かれていたし、九寨溝からバスで4、5時間ほどのところにある黄龍は、以前この地にツアーで訪れたという人のスナップ写真を見てその不思議な美しさに驚嘆し、それこそ「死ぬまでに一度見てみたい」と思っていた場所だったのだ。これはちょうど良い機会ではないか。

目的が決まるとチベットの山へと逸る気持ちも落ち着き、月曜日になるのを待って公安に向かった。ビザの延長手続きは簡単だったが案の定受け取りは4日後だ。その足でバスターミナルに行き九寨溝行きのバスチケットを買い求めたが、翌日発のチケットは既に満席。結局、出発は水曜日になってしまった。

九寨溝に向うバスに乗り込むと、私の席には既に先客が座っていた。「友達と並んで座りたいから席を替わってくれな



い？」戸惑いの表情を浮かべる私に、座っていた女の子が声をかけてきた。一人で来ている私は何処に座っても同じ事、そんな事ならお安い御用だ。

それがきっかけで目が合うたびに笑顔を交し合うようになり、何度も笑いあっているうちに親近感が生まれたのか、お菓子や果物などをわけてくれるようになった。些細な事だが私は嬉しくなってしまった。

私はかつてタイ国にしばらく滞在した事があり、『微笑みの国』との異名をとるタイではこのような事は日常茶飯事だった。私がすっかりタイにハマってしまい二年近くの間タイに滞在した後、数年間自分でタイ料理屋を営むまでになってしまったのも、元はといえばタイ人のこの気質に惹かれてしまったからだ。その頃の私は中国の事は何も知らなかったが、かつて私がタイ料理屋を営んでいた辺りで出会った中国人はお金を稼ぐためだけに日本にやってきているような人が殆どだった。つまらない事で口論となった事も一度や二度ではなく「自分勝手である人達」というのが中国の漢民族に対して私が漠然と抱いていたイメージだった。そうで無い人もいるという事は重々承知していたが、そうである人が私の周りには多すぎた。

そして、いざ中国に来て私も二度ともすぐにチベット圏の方に入り込んでいたので普通の中国人と接する機会は今までほとんど無かったのだ。実をいえば、今回の一人旅をするに当たり「これまでの穏やかな国を旅するのは訳が違うだろう」と中国に対して構えているような気持ちも少なからずあった。

それがどうだろう、ひとたび漢民族の中に入ってしまう彼らも十分に人懐こく優しい国民なのだ。私は肩透かしをくったような気持ちで思わず苦笑してしまっ。心の中で勝手に

描いていた中国人に対するイメージが、彼女の笑顔によって崩れていくのを感じていた。この旅が楽しくなりそうな予感に胸がときめいた。

期待に胸を膨らませて訪れた九寨溝は確かに美しかった。が、やはりものすごい観光地だ。いくら美しい湖でも背後にバス道路が敷かれ、ひっきりなしにバスの音が響く環境では白けてしまう。四姑娘山の雄大な自然の中で過ごしてきた私には、その美しさに素直に感動できる気持ちにはなれなかった。

しかし、翌日向った黄龍は立派な観光地でありながらも、朝一番に園内に入り人が少なかった事と、環境に配慮された遊歩道の作りによりその美しさを十分に堪能する事ができた。観光地の風景は、美しい部分だけを切り取った写真で見たほうが実際より美しい場合もよくあるが、黄龍の風景は写真で見ると何十倍も美しかった。まるで今にも天女が舞いおりてきそうな風景だ。極楽というものがあるならば、黄龍はまさに極楽の風景だ。

今でこそ観光地となっているものの、この土地がまだ手付かずの自然の中にひっそりと存在していた時代にこの美しい渓谷を発見してしまった人は、どれほど驚いた事だろう。まさに神の住む場所として驚き、崇めてしまった事に違いない。そんな時代に何時間も山の中を歩いて見に来たかったものだと思う。苦労の末にそこまで来た者だけが見られる宝物のような場所。九寨溝や黄龍もそんな場所であって欲しかった。しかし現在の状態がどうあれ、このような自然が存在しているというだけで中国はすごい。本当にすごい。今までのイメージは何処へやら、私は中国の国土に対し尊敬のような気持ちを感じ始めていた…。

しかし事態はのんびり中国を尊敬している場合ではなかった。旅に出ていると曜日の感覚が無くなってしまふ。旅人にとっては毎日が日曜日のようなものなので、日記でもつけていない限り今日が何曜日かなんて事は考えなくなってしまうのだ(少なくとも私はそうだ)。成都からバスで九寨溝と黄龍に遊びに行けば、どうやっても二泊三日は必要なので、出発が水曜なら戻るのは土曜である。

九寨溝から戻ったらすぐビザを取りに行って成都を出発しようと思っていた私がその事に気づいたのは、黄龍を後にしたバスの中でだった。成都に帰ったら、またしても公安はお休みだ。「やられた〜……」が、今更後悔しても始まらない。とにかく今はまだ九寨溝の旅の途中なのだ。来週の事より今日の事だ。

黄龍からのバスは川主寺という街で終点だった。今日中に成都に戻るバスは無いので、今夜はどこかに宿を取らなければならない。翌日の成都行きバスは川主寺から出るので、普通に考えれば川主寺バスターミナルの近くに宿を探すのが一番楽な方法だが、私はそこからタクシーで15分程の『松藩』という街が気になっていた。成都で滞在している宿におかれていた、宿泊客が書き残した旅の情報ノートに、「九寨溝、黄龍

に行かれる方は帰りにぜひ松藩に寄ってみて下さい。とても良いところですよ」との記述があったのを覚えていたからだ。

松藩がどんな場所なのかは例によって全然知らない。だが他の旅人が訪れて楽しかったと言っている場所に行かずに済ましてしまうなんて、私の好奇心が許さない！松藩まで行ってしまったら、明日の成都行きバスにどう乗れば良いのかも分からなかったが、そこに行っている旅行者がいる限りなんとかなる筈だ。とにかく松藩まで行くと決めた時にバスは川主寺に着いた。

川主寺から成都行きバスは朝の6時半と7時の二便だけだった。とりあえずバスのチケットだけは今日中に買っておいただ方が良いだろうとチケット売り場に向かうと、同じバスから降りた何人かの中国人旅行者達もチケット売り場に集まっていた。

明日のバスにどう乗るのか解からず不安だった私は、隣にいた中国人の旅行者に話しかけてみた。彼等も今日は松藩に泊まり明日成都に向かうとの事だった。成都行きバスは川主寺を出た後に松藩を通るので、ここでチケットを買っておいで明朝路上で成都行きバスをひろえば良いと教えてくれた。

たどたどしい中国語で話しかけてくる私を頼りなく思ったのか「明日の朝、僕達と一緒にバスをひろえば良いよ」と私の分のチケットも交渉してくれたが、残念ながら彼等と同じ6時半のバスのチケットは既に売り切れ。私は一人で7時のバスに乗る事になった。

ともかくにも明日のバスにはなんとか乗れそうだし、チケット売り場で出会ったこの中国人の青年は優しい人だった。広東省から兄と妹で旅行に来ているのだという。更に、桂林から来て一人で旅行しているという中国人の女の子も松藩に行くという事で仲間に加わり、4人で一緒にタクシーで向かうとバスターミナルを後にした。

田舎のタクシーにはメーターなど無いので交渉制だ。桂林女子のモーレツながらも可笑しい値下げ交渉に広東兄妹と思わず目を見合わせて笑ってしまい、次の瞬間には4人共とても打ち解けた気持ちになっていた。

松藩に着くと自然と一緒に宿探しとなり、やり手の桂林女子と広東兄が路地裏にある素敵な民宿風の宿を見つけてくれた。一階は宿の人達の住居で、二階がお客さんを泊める宿になっている。建物自体は古く、質素な部屋ではあったが、磨きこまれた木の階段や木の手すり。隅々まで掃除の行き届いた清潔な部屋。宿の主がこの家を大切に暮らしているのが伝わってくるようだ。私は一目でこの宿がとても気に入ってしまった。

しかも宿泊費はたったの10元だ。日本円にして150円。私は嬉しくてたまらなかった。1時間前には今日をどう過ごせば良いかも分からずにいたのに、今は素敵な仲間もできて、こんな可愛い宿に泊まれる事になるなんて、なんて幸運なんだろう。旅って本当に面白い。

宿の中庭ではおばあさんがのんびりと靴の中敷に美しい刺

繡を刺していた。「え～!? こんな綺麗な物を靴の中に引くの!? 私だったら額に入れて壁に飾るよ!」私が驚いて見ていると、広東兄が笑いながらおばあさんにその中敷を売ってくれるように頼み、「松藩の記念だ。日本に帰ったら額に入れて飾りなよ」と渡してくれた。まったく、誰が中国人は性格が悪いなんて言ったんだ～!!

その時、宿のおじさんが盛んに何か話しかけてきた。広東妹によるとおじさんの言葉は訛りが激しく、中国人である彼らにも聞き取るのが困難であるらしかったが、何度も聞き返したところ「一緒に写真を撮ってくれ」と言っていたのだそうだ。おじさんの宿は目立たない路地裏にある為にお客さんが少ない。そこで旅行者と一緒に写っている写真を宣伝用に使いたいという事だった。事情が解かった私達は、宿のおじさんと一緒にうんと仲良さそうなポーズをとって何枚も写真を撮った。

宿に荷物をおろした後はすぐに松藩の街に出て、四人で街の中をぐるぐる歩き回った。ついさっき出会ったばかりなんてウソみたいだ。私達はまるで古い友人同士のように打ち解けて、一緒に写真を撮り、店を見て回り、あちこちの屋台で(桂林女子の活躍により)値切り倒しながら買い食いをし、食べ物屋を何軒もはしごして夜更けまで遊んだ。みんなずっと笑っていた。楽しくて楽しくてたまらなかった。このまま4人でずっと一緒に旅が続けられたらいいのになあ…。夜更けの街を歩

きながら、そう思っていたのはきっと私だけではなかったと思うけど。

幸せな気持ちで眠りに着いたのもつかの間、ほんの数時間で目覚まし時計の音にたたき起こされた。松藩は回教徒の多い街だそうで、写真が趣味である広東兄の希望で回教徒の礼拝風景を撮影するため、私達は朝5時に宿を出て街の回教寺院へと向かった。

それは私の知っている玉ネギのような形の屋根を頂いたイスラム教のモスクとは大分赴きが違い、外見的には中国寺院のような木造の建物だったが、中では厳粛な雰囲気回教徒の礼拝が行われていた。

結局、異教徒が寺院の中に入る事は許されず写真撮影はかなわなかったのだが、そのピンと張り詰めた厳粛な空気は、やはり異教徒が乱してはならない神聖な物なのだと私にも感じられた…。またしても中国にやられた。

私は松藩に来るまで中国人の中にも回教徒が居るという事さえ知らなかったのだ。日本の何倍もの国土を持つ中国は自然、民族、文化共一筋縄ではいかない。次々と思いもよらなかったものを繰り出してくるのだ。

寺院の入り口に並んでいた回教徒達の脱いだ靴の中にはそれぞれ、広東兄が私に買ってくれたのと同じ様な美しい刺繡の施された中敷が入っていた。

(続く)

中国を読む③ 「中国を読む」からの出会い

「わんりい」を毎月ファイルしていたら、ファイルの袋が残り少なくなっていた。もうそんなになるかと、指折り数える。ファイルしはじめてからから四年が経過、さらに「わんりい」はもう15年目を迎えるのだと気がつき、改めて驚いてしまった。毎月毎月、原稿を集め、編集し、刷って、発送する作業を積み重ね、ふと後ろを振り返れば万里の長城のような道が出来上がっていたのだろう。それはとても崇高な道だ。

旅好きな好奇心旺盛な人たちの投稿と同じ誌面で何かを書かせて頂いて、得られた経験は多い。例えば紹介した本の著者からメールをもらうとか。たまたま紹介した本の出版元に行くことがあり、編集者経由で著者に伝わった。彼女は私と同世代の写真家で、編集者に教えてもらう前から「わんりい」のHPで書評を見て、誰が書いたのか気になっていたという。丁寧な文面の御礼。読書という受動的で閉鎖的な営みのなかで、著者から接触をもらったのは当然初めてで、自分から発信する凄さを感じた。

「風をたべた日々」の著者、渡邊氏との出会いも偶然だった。会員の佐々木さんに「面白いよ」と紹介された本書はすでに品切れで、入手できる方法は著者

からの直接購入。本を送付していただき、さらにたまたま出掛けた写真展で偶然お会いし、田井さんのホームパーティにお誘いしたことから、田井さんの手腕で「わんりい」主催の講演会が開催された。旅先で出会う人々のスケッチははじめ銃弾の痕が生々しく残る家屋や寺院の写真をスライドで見、渡邊氏の話聞く。自分の手で触れ目で確かめることで、初めて見えることもある。旅が教えてくれることは膨大にあることを、旅人の渡邊氏は知っている。

ネタ切れを心配してくださる会員の皆さんから、本を紹介頂くことは多々ある。例えば「小蓮の恋」「陝北紀実」「父の帽子」など。オススメの本にふさわしい、いい本だった。なかには品切れのものもあり、教えてもらわなければ一生出会うこともなかった。

出会いは運命だと感じる。ほんの少し動くと、たくさんの出会いにぶつかる。「わんりい」はその出会いを紡いで万理の長城を作っているのかもしれない。仕事を言い訳にここ数年、立ち止まっている私だけれど、来年は少しは動きたいという願いも込めて、新しい「わんりい」ファイルを買いにゆく。

(真中智子)

ぼくが見て感じたスリランカ紹介 4 世界一高価な玩具

赤岡健一郎 (日本スリランカ武道協会
日本スリランカ文化交流協会)

世界一高価な玩具はスリランカの車と言った友人がいました。確かに全員ではありませんがスリランカの大人は自分の車を手に入れた時はもちろん、他人の車であってもハンドルを握った時には、まるで念願の玩具を買ってもらった子供の様に目を輝かせます。新車でも、動くのが不思議と思われるビンテージ物のモータースでも同じです。

スリランカには国産車がないので全て輸入車になります。関税が高いので車を持つと云う事は、一部のお金持ちを除き大変な努力の結果だと言えます。このような事情からか、車を買うためにお金を貯め、可能な限りのコネを使い、やっと入手した車にける愛情は大変なものです。ところが、子供が玩具で遊ぶのと同じで最初のうちは大切に扱うのですが、徐々に大胆になり自分の都合にあわせて運転するようになります。スピードを出す事と前の車を抜く事が生きがいになる人を多く見かけます。

コロomboをはじめ各都市では朝夕および学校の下校時に交通渋滞があります。コロomboでは自宅で昼食を取る人も多いので小規模な昼食渋滞、金曜日の午後にモスクへ礼拝に行くための渋滞があります。

私の自宅からオフィスまで歩いて4～5分の距離でしたが、渋滞時に車を使うと20～25分かかります。私は日本では社有車に乗るような立場ではないし、歩くのが好きですから歩きたいのですが、外国人が歩いて出社するのはみっともないと言って運転手のウダヤ君が歩かせてくれませんでした。そのためにオフィスはすぐ目の前なのに自宅を早く出る事になります。ウダヤ君は毎朝4時に起きて郊外の町からバスを乗り継いで私の自宅まで来ます。そして洗車、ワックス掛けをして車をピカピカにして出番を待っています。

日本でも一昔前はそうだった様に、車に乗っている事がステータスのようです。町中では歩く事を除くとバス、タクシー、三輪車等を含む自動車の類しか移動手段がないので道路が混むのはしかたないのですが、日本人を始めとして多くの外国人は職住接近の環境で生活しているにも拘わらず、たくさんの方がこんな理由で不必要に車を使っている事が渋滞の一因ではないかと考えてしまいます。私も赴任から1ヶ月ほどは出社時や昼食時に車を使いましたが、その後は歩くことにしました。それでもウダヤ君は毎朝車を磨き、私より一足早く出発します。

私は少し遅れて家を出て、途中で渋滞に巻き込まれているウダヤ君に手を振り、途中で顔なじみの三輪車のオヤジさんと朝の挨拶をし、いつも居る乞食さんと挨拶をし、オフィスでウダヤ君の到着を待つのが日課でした。渋滞の無い日もたまにはあるので、そんな日はウダヤ君がオフィスの駐車場ですら嬉しそうにニコニコしながら私を待っている事は言うまでもありません。

コロomboは町自体が小さいのでバンコクやジャカルタの渋滞を知っている人にとっては、極めて短時間で局地的な渋滞で

しかありません。この短時間の渋滞の中でも多くのドライバーは1台でも多く前の車を抜く事が使命とばかりに、少しでも車間が空くと我先にと車の鼻先を突っ込んでいきます。そして身動きが出来なくなるばかりでなく接触事故も多発し、これが新たな渋滞を呼び起こす事になるのは判っていても、してしまうようです。渋滞時だけではありません。道が空いてくると、それぞれの車が可能な限りスピードを出さないと気がすまない傾向にあるようです。

先が見通せないブラインドカーブや狭い道でもアクセルを緩めない人、反対車線を走って無理な追い越しをする人が数多くいます。その結果として運の悪い場合には、満員バス同士の正面衝突や通学中の子供達の列に突っ込むような大事故になります。新聞では毎日の様に悲惨な事故が報道されますが、プロドライバーだけでなく多くの一般ドライバーも運転マナーに関しては殆ど重視していないようです。普段は温厚なスリランカの人達ですが、車の運転をする時には同じ人かと疑ってしまうほど変わってしまう人が多いのには驚かされます。

ウダヤ君も当初は可能な限りスピードを出して、スラローム競技の様に車の間をぬって運転する事が上手な運転と考えていたようです。他の多くの人もこう考えています。ある日、キャンディまで遠出をした時に彼と話をしました。どんなにスピードを出しても、何台車を抜いても3時間の道のりが2時間に縮まらない。のんびりと景色を楽しみ、話しながら行っても4時間かかる訳でもない。事故を起さずに、道路事情を考慮して時間通りに目的地に着くのが上手い運転。事故を起したら、他人を傷つけるだけでなく自分の家族をも悲しませる事になるといった内容でした。彼の運転は徐々にではありますがおとなしくなりました。スリランカの人だけでなく、日本人でもこのような運転をしていると思いが当たる人はいませんか？

みなさん、自分だけでなく周囲の人達のためにも安全運転をしましょう。

‘わんりい’のおたより会員継続のお願いとお誘い
年会費：1500円 入会金なし
郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本に見えている方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催しています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行しています。

新規入会はいつでも歓迎しています。会費は、おたより制作費と送料及び活動のサポートに当てられています。活動の様子はおたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。問合せ：042-734-5100 (事務局)

先日、アメリカでは中間選挙があり、ブッシュ大統領への批判が形となる結果になった。国民が直接大統領を辞めさせたり、選んだり出来るというのはこんなにも国民を興奮させるものなんだと改めて思い出した。

2002年12月、ケニアでは大統領選挙が行われた。結果的には、25年続いた与党KANU(ケニアアフリカ人同盟)を率いるモイ大統領が敗北し、野党NARC(国民虹の連合党)のリーダーであったキバキが勝利し、大統領となった。意図することなく偶然この年にケニアに滞在していた私は、ケニアの歴史的瞬間の一部始終を自分の目で見る事が出来た。

ケニアは1895年にイギリス領になってから、1963年にケニヤッタ大統領が独立を勝ち取るまでに長く植民地の時代が続いていた。独立しても完全に独立したとは言えず、旧植民地の影響を政治的、経済的に受けてきた。それは、イギリスの議会制を継承し、また憲法もイギリスの影響を受けるなどの政治体制に強く表れている。ケニヤッタ大統領は「ケニア建国の父」と呼ばれ、今でも国民の尊敬と憧れの的であり、国会議事堂の横にお墓が作られ、一般の人でも外から見学出来る様になっている。

そして彼のあとを継ぎ、その後のケニアを今の姿を作ったが1978年に誕生するモイ大統領である。大統領の任期は憲法で5年と定められているが彼は5回も再選を果たし、25年に渡りケニアの大統領に君臨し続けた。

ケニアだけに限ったことではないが、アフリカでは植民地からの独立後誕生した国家の大統領は長期政権になることが多く、また一党独裁政権であることが比較的多い。そのことが結果的に、一部の階級への富の集中、政治家の癒着、汚職、貧富の格差といった問題に繋がってきたことは確かである。モイ大統領も自身の出身部族であるカレンジン族を積極的に要職に就かせるなど自身の民族をかなり優遇していたことは有名である。結果、ケニヤッタ大統領の時はプラス成長を続け、最高6%の経済成長を見せていたケニア経済も、モイ大統領が大統領に就任した1978年の5.2%を境に下降線を辿り、2000年にはついにマイナス0.2%の成長となっている。

そして、2002年の大統領選挙にモイ大統領は出馬せず、ケニヤッタ大統領の息子のウフル・ケニヤッタを推薦しKANU(ケニアアフリカ人同盟)体制の継続に努めたが、国民は、野党連合のNARC(国民虹の連合党)を選んだ。ケニア独立後初めての野党政権となったのである。

ケニアの経済が伸びていかず、貧困も解消せず、失業率が50%以上とも言われる状況が続き、人々のKANU体制への批判は、そのままストレスとなりケニアの方向性をケニア国民一人一人の手で変えようという動きへと発展していった。その頃のメディアや人々の会話には、NARCに賭ける思いがあふれていたように感じた。大統領選挙は直接選挙なので一人一人に選挙権がある。また議員を選ぶそれぞれの選挙区でもNARC支持の候補者は地元の強い支持を受けて選挙戦を展開していた。街頭パレード、演説、ビラ配り、ポスターを貼り、選挙カーで支援を呼びかける等、選挙活動はとても熱狂的であった。特に若い世代は熱狂的にNARCを支持し、その熱がKANU批判に繋がり、選挙区によっては強く対立した結果、暴動になることもあった。選挙権のない私にも、NACKを支持することの大切さを延々と話し始める人、歩いていてもビラやポスターを持って来る人もいる。「ケニアを変えよう」という信念で人々は活動していた。

そしてNACKは222議席中125席を取って与党となり、その中心人物であるキバキを大統領にした。キバキはケニア最大部族のキクユ族出身であり、ケニアで国会議員をする前は、ウガンダのマケレレ大学の経済学部長として長年教職に着いていて、国費留学してイギリスのロンドン経済大学で学んだエコノミストであり、経済は彼のライフワークであり、専門とするところである。そのことへの国民の期待も大きかった。ケニアの経済を立て直してくれるのではないかと。そして、彼が就任後特に力を入れたのが汚職追放ということであり、職権乱用、特定部族優遇が常であった国会から汚職担当大臣や部署を作り徹底的に無くしていくと努力している。ただ、大臣にはキクユ出身が多かったが「優秀な人を適切なポジションに置いてだけ」と彼は言っていた。

実際、ケニアの生活は外国人の私が見ても分かるくらい、少しずつ無駄や非効率的なことがなくなっているな、と感じる。目で見て分かる例としては、公共の移動手段マタツの概観を白色に統一し、定員も定め、シートベルトを着用を義務つける。ストリートチルドレンを直ちに政府が保護し、町にあふれないようにする等。一人一人が国を変えていく、良くしていくという気持ちになっていることが今のケニアのエネルギーになっていると思う。もちろんすべては一日で変わらない。しかし、変わろうとしている今の流れを保っていききたいものだ。

現在ケニアのGNPは2006年6%を越えていて、2007年には6.3%になるのではないかと世界銀行などは予想している。2005年には、憲法改正に伴う国民投票を実施し、植民地経済からの真の解放を目指して、ケニアは熱いスタートを切ってから4年、その結果は少しずつ統計にも表れてきている。しかし、統計に表れない人々生活の向上として形に表れるのはまだ時間がかかりそうだ。来年は再び大統領選挙の年だ。キバキ大統領は続投するのか、国民はこの5年間の審判を来年下すことになる。

「もったいない」で日本で有名になったワンガリ・マータイ環境副大臣は、環境の分野でノーベル賞を受賞したが、彼女の選挙区はTETUというところで私の旦那のふるさともこの選挙区に含まれていて、この地域にも昔からよく植林活動に来てくれていたそうだ。明日どうなるという生活の中で暮らす農村の人々に「木を切った分だけ植えよう」と教育し、実践させていった彼女の功績はとても大きいと思う。ちなみに彼女もNACKの議員である。

‘わんりい’の活動から

★2006夢広場(2006年11月4日於:ぼっぼ町田)



国際交流センター広報担当:米澤尚洋さん撮影の‘わんりい’の店

2006夢広場本番のお祭は、食と文化にテーマを絞った催しで、‘わんりい’も夢広場参加では初めてエスニック焼鶏の屋台を出店しました。焼鶏は、人手が要るからなーと、当初はためらう向きもあったのですが、多数の参加を頂いて和気藹々とお祭気分を楽しみました。

ビールは季節柄まあまあの売れ行きでしたが、焼鶏は、本場の味を知っていらっしゃるチ・ブルグッドさんも太鼓判を押してくださる美味しさで好評でした。参加団体の皆さんもまとめて買ったださったので、お祭の終了を待たず完売できました。終了間際ばらばらと雨が落ちてきたがまずまずの天候に恵まれたお祭日和で賑やかに終了しました。

関連事情として開催の、「町田にゆかりの中国人画家四人展」では、70点近い作品が掲示され、迫力の展覧会でした。

また、11月5日(日)は日本折り紙協会所属の小林慶子さんが‘わんりい’関係者として、遊べる折り紙の指導をしてくださいました。PRが行き届かなかったきらいがありました。参加の子供たちは三枚の折り紙を組み合わせて折る独楽の彩り美しい回転に感激していました。

日本で生まれた折り紙が、その内いろいろな国で子供たちとの交流のきっかけ作りにきっと役立つ時が来ると思っています。

☆国士舘大学ビジターセッションのお手伝い 2006年11月13日(月)

毎年秋、国士舘大学留学生たちの日本語授業の一環として、留学生と一般の日本人とが小グループで今様の社会問題について話し合うビジターセッションという授業があります。おそらく4回目のお手伝いのお誘いを今年も頂き、‘わんりい’会員と関係者12名(+他団体から5名)がビジターセッションに参加して、留学生達と“少子化”、“いじめについて”“自殺の増加”“ごみ減量”“退職後の仕事”“介護問題”などなど、生活に身近な問題について話し合いました。

対象は主として中国と韓国からの留学生達です。この授業に参加して、毎回感心するのはどの留学生も、アルバイトなどで忙しいなか、しっかりと目的を持ち、真面目に一生懸命勉強するとともに日本の社会情勢などにも深い関心を寄せていることです。

今回初めて参加された方々も、その年齢差にも拘らず留学生が真摯に耳を傾け討議する態度に好感をもたれたようでした。近年、アジア各国から留学生が急速に増えてきているのですが、この授業のような形で留学生達と話し合う機会が少ないのが現状です。このような機会が日常的にももっともっと増え、市民レベルでの交流による相互理解が深まることを希望してやみません。

(田井)

ご予約下さい!! ‘わんりい’新年会

‘わんりい’の2007年度新年会の日取りが決まりました。恒例の、美味しい「羊肉のしゃぶしゃぶ」とビンゴや楽しい福引が皆さんのご参加を待っています。お早めに事務局にお申込下さい。

2007年2月4日(日) 11:00~14:00

参加費:1500円

定員:40名(‘わんりい’会員と関係者のみ)

TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル 内モンゴル公演凱旋コンサート

音楽總監 チ・ブルグッド



内モンゴルの首府フフホト市での、日本人による初めての馬頭琴アンサンブル公演は大成功でした！この度、内モンゴルでの公演を記念して凱旋コンサートをいたします。皆様のご支援をよろしくお祈りいたします。

2007年1月14日(日) 18:00開演 於：野方区民ホール

前売り1500円/当日2000円(全席自由)

東京都中野区野方 5-3-1
03-3310-3861



- お申込&お問合せ：TEL/FAX：042-498-4820(永瀬)
- 携帯：090-1549-2660(永瀬) ●E-mail:manba@hotmail.co.jp

主催：TOKYO万馬馬頭琴アンサンブル
後援：国際交流日本馬頭琴協会/中国馬頭琴学会

金 亜軍 揚琴リサイタル

揚琴伝来の旅シリーズ「^{きらめき}煌」in東京

2006年12月15日(金)

19:00開演(18:30開場)

於：王子ホール(東京銀座)

前売り4500円 当日5000円

全席指定

問合/申込：TEL/FAX

03-5748-3040(ラサ企画)

ホームページからチケット申込みが出来ます

<http://www.youkin.com/kin/shopping.html>

主催：金亜軍揚琴リサイタル東京実行委員会



魅惑の板胡—沈 誠

中国国宝楽団2003日本公演の若手メンバーとして
板胡の音色で魅了の沈誠、待望の再来日!

2007年2月4日(日) 14:00開演(13:30開場)

於：HAKUJYUI HALL

代々木公園駅(千代田線)/代々木八幡(小田急線)下車徒歩5分

前売 5500円 当日 6000円

企画・制作・主催：ラサ企画

予約/問合：TEL/FAX 03-5748-3040

E-mail lasanon@db3.so-net.ne.jp

GHADA



ガーダ — パレスチナの詩

大地・自由・平和・夢… 歌うことが希望をつなぐ

*上映後、古居みずえ監督のトークあります

2007年1月13日(土) 14:00(開場13:30)

於：町田市民フォーラム3Fホール

原町田4-9-8 TEL042-723-2888

一般：1300円(当日1500円)

学生：1000円(当日1200円) *久美同本店でも購入出来ます

主催：町田で「ガーダ」にであう会・STEP by STEP 平和

'わんりい' 12月定例会：12月18日(月)

おたより発送：12月27日(水) 共に田井宅13:30~

*今年も皆様のお力のおかげでございました!